

Q 8 主体的に考え、話し合うことができるようにするには、どのような発問にすればよいのでしょうか。



発問はねらいを達成するための重要な役割を担っています。教師による発問は、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考や話し合いを深める上で重要です。また、内容項目に伴っていない児童の実態や教材中の児童の疑問から発問を作ることによって問題解決的な学習となり、より主体的に考え、話し合う授業へと意図することができます。

導入の例

ねらいとする価値の方向づけ

1年「はしの上のおおかみ」(親切、思いやり)

道徳的価値に関わる発問

「今まで、親切にされてうれしかったことはありますか。」

本時で学習する道徳的価値に意識が向かうような発問をします。

教材の内容に関わる発問

「どんな動物が好きですか。」
「おおかみについて知っていることはありますか。」



- * 教材の内容が難しい場合は、言葉や出来事の説明をしたり、簡単に内容を説明したりすることもあります。
- * 事前にアンケートをとり、アンケート結果を導入に生かす方法もあります。

展開前段の例

教材による価値の追求

6年「手品師」(正直、誠実)

主人公の考え方や感じ方を想像する発問

「たった一人のお客様の前で、手品を演じているときの手品師はどんな気持ちだったでしょう。」

多様な見方、考え方ができる発問

『「せっかくだけど、あしたはいけない。」と電話で友人に言ったとき、手品師はどんなことを考えたでしょう。」



(教材中の児童の疑問から) 考える必然性や切実感のある発問

「なぜ、手品師は大舞台で手品をするを選ばずに、たった一人のお客様の前で手品を演じたのでしょうか。」

展開前段の例

- * 教材を通して、主人公の言動や生き方から道徳的価値を把握できるような発問を考えます。
- * 考える必然性や切実感がある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考える発問などを心掛けることが大切です。
- * 児童の疑問から発問を作り、問題解決的な学習にする場合は主人公の心情の変化や心の葛藤に注目させることが大切です。教材分析で、道徳的価値を把握できるような発問を教師が考えることと児童の思考をあらかじめ予測しておくことが必要となります。授業で児童の疑問を取り上げる際の視点は道徳的価値が把握できるものかどうかで判断をしていきます。

展開後段の例

自分とのかかわりで価値をとらえる

4年「雨のバス停留所で」（規則の尊重）

自分の道徳的価値を見つめる発問

「きまりについて、今までの自分をふり返ったり、これからの自分がどのようにきまりと関わったりするかを考えましょう。」

これまでの自分自身の経験を振り返り、今後の実践的意欲につながるようにします。

自分の生活経験と道徳的価値を結びつける発問

「きまりを守ってよかったことはありますか。それはどんなことでしたか。」

日常生活の中の場面を想起させながら考えることで、ねらいとする価値を体得できるようにします。



(児童のきまりが守ることができていない実態から) 考える必然性や切実感のある発問
「きまりを守るために大切なことは、どんなことでしょう。」

- * 自分の生活にふり返ることで道徳的価値を一般化していきます。
- * 導入などで児童の実態から本時の目標となるような内容項目に関わる発問を作り、教材を通して心情理解を行った後に考える授業展開もあります。児童の内容項目に伴っていない実態から作られた発問のため、自然と問題意識が芽生え、より主体的に考え、話し合う授業への期待ができます。

